

## 老人二題

### その二 釣りをする老人

秋川の左岸の河川敷(かせんじき)にサイクリングロードを兼ねた遊歩道がある。家からは少し距離があるが、お気に入りのコースなので、時々ウォーキングの足を延ばして水辺のこみちを散策する。

土手沿いにある田ん圃を潤した農業用水がこの道を横切って、秋川本流に還(かえ)るところがある。水路の中は二メートルにも満たないのだが、コンクリートで出来た大きな導水管を埋めた道路のところだけは勾配が急なので、水は渦を巻いて流れている。

先日、そこで釣りをしている老人を見かけた。流れの淀んだところを目がけて針を投げ込みむ動作は手馴れたものだった。小魚を釣っているのだが、合わせが的確だった。魚が浮きを引き込むとチョンとわずかに竿先(さおさ)を跳(は)ね上げる。百発百中、まずしくじることにはなかった。

先客が二人居てしきりと話しかけていたが、かの老人は、口をキュッと引き結んだまま不機嫌な顔つきで押し黙っている。取り付く島も無い。ずいぶん無愛想な年寄りだな、と思った。気を引こうとお世辞タラタラ、見事な釣りの腕前を誉めそやしていた二人だったが、やがてスゴスゴと立ち去って行った。

思いがけないことに二人が居なくなると、老人が話しかけてきた。

「あんたも釣りをおやりかな」とか

「まだ、ここに来て釣りはじめたばかりだ」とか

「向こうで釣っていたんだがこっちの方が釣れそうなんで・・・」

ぼつりぼつりと語りかける口調は朴訥(ぼくとつ)で銜(てら)いがない。たぶんのこの土地で生まれ育った人なのだろう。

針にかかった獲物を外すのを見ながら「ハヤですか」と聞くと、「そう、アブラツパヤだよ」と言っ

て自転車のハンドルに掛けていたビクを外し、水を棄てて中を見せてくれた。そこには、十数匹のハヤに混じって姿のいいマスが一匹入っていた。3kmほど下れば多摩川との合流点だ。鮎が釣れるのは知っていたがこんな下流でマスが釣れるとは思っていなかった。

ビクの中を覗きながら、「から揚げにするのに手頃な大きさですね」と言うと、「そうなんだが、うちのバアさんは、川の魚は汚いとか臭いと言って食わせたがらないんだ」と言う返事が返って来た。

「田ん圃に引いて稲を作っているくらいだから、ここの水はそれほど汚くはないでしょう」

「女はバカだから、それがわからないんだ。しかたが無いので、釣った魚は電子レンジを使っ

て自分で焼いて食べているんだ。…でも、バアさんは男が台所に入るのをすごく嫌がってね…」

「そうですか、うちのもそうなんです、男子厨房(だんしちゅうぼう)に入らず、の世代なんです」

「から揚げにすれば、どんな魚だってうまく食えるのに…」

無愛想だと思った老人は意外に饒舌(じょうぜつ)だった。老妻の無理解を嘆き、家にいても何もやることが無いこと、退屈なので週に二、三度は釣りに出かけること。

もう少し上流に行けばイワナやヤマメが釣れること。

自転車で移動しているが歳なのでそんなに遠くまで行けなくなってしまったことなど。二人連れにはあれほどつれなかったのに向こうからしきりに話しかけてきた。

妙見宮のお婆さんの時もそうだったが、ここでも切り上げるきっかけを掴めずに、つい長話をしてしまった。

2005年 春